

# 日本の美術教育の新しい教育課程と韓国への示唆

金 香美\*・福田 隆眞・佐々木 宰\*\*

What Korea can Learn from the Revised Art Curriculum of Japan

KIM Hyang Mi\*, FUKUDA Takamasa, SASAKI Tsukasa\*\*

(Received August 5, 2010)

キーワード：日本 美術教育、韓国 美術教育、教育課程

## はじめに

日本では2008年から小学校、中学校において新しい教育課程が施行された。学習指導要領は以降3年間で完全実施の予定である。美術教育においても新しい学習指導要領が始まり、新たに「共通事項」という内容で形や色とイメージの形成を促す内容が取り入れられた。本稿では日本の新しい教育課程の方針、美術教育における共通事項、そして小学校、中学校での教科書の教材例の紹介、さらにこれらことから韓国で参考となる事柄について考察する。なお本稿は韓国の研究者等のためにハンゲルでの要約を並記している。

## 1. 本の新しい教育課程

日本では2008年に教育課程が改訂され、現在その移行期にある。

2008年の改訂では、中央教育審議会の答申を受けて以下の7つの点を考慮して行われた。

- ①改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領の改訂
- ②「生きる力」という理念の共有
- ③基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ④思考力・判断力・表現力等の育成
- ⑤確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
- ⑥学習意欲の向上や学習習慣の確立
- ⑦豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

そして今回の改訂のキーワードは「生きる力」、「コンピテンシー」、「学力」の3つである。コンピテンシーとは様々な能力のことであり、知識や技術を活かす能力、人間関係を築く能力、自律的に行動する能力など生きる力に関わる実際的な能力を示している。また、学力の捉え方も具体的に示されて以下の3点を示している。

- ①基礎的・基本的な知識・技能の習得

---

\*淑明女子大学教育大学院兼任教授 \*\*北海道教育大学釧路校教授

②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等

③学習意欲

このように、学力を単に知識や技術の習得と捉えるのではなく、知識や技術を活かした技能を習得し、それらを応用しながら問題の解決に自立的に当る能力を学力として捉え直している。

## 2. 小学校、中学校の美術教育と共通事項

教育課程の方針に基づいて、小学校、中学校の学習指導要領は次のような観点から作成された。

①創造することの楽しさを感じるとともに、思考・判断し、表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること。また、生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心を持って、生涯にわたり主体的に関わっていく態度を育む。

②子どもの発達段階に応じて、内容の連続性を配慮し、育成する資質や能力と学習内容の関係を明確にする。小学校、中学校で共通に働く資質や能力を共通事項として示す。

③創造性を育む体験の充実を図り、形や色によるコミュニケーションを通して、生活や社会と豊かに関わる態度を育成し、美術の働きを実感させる指導をする。

④鑑賞する喜びを味わい、感じ取る力や思考する力を一層豊かにし自分の思いを語ったり、自分の価値意識をもって批評し合ったりする。

⑤美術文化の継承と創造への関心を高めるために、主体的に作品を味わう活動や日本の美術や文化に関する指導を一層充実する。

そしてここで示された共通事項として、造形要素と視覚言語によってイメージを豊かにすることを促している。以下は、小学校と中学校の共通事項について述べる。

### 2-1 小学校図画工作科での共通事項

小学校図画工作科の学習指導要領では共通事項が次のように示されている。第1学年及び第2学年では、「ア 自分の感覚や活動を通して、形や色などをとらえること。イ 形や色などを基に、自分のイメージをもつこと。」としている。第3学年及び第4学年では「ア 自分の感覚や活動を通して、形や色、組合せなどの感じをとらえること。イ 形や色などの感じを基に、自分のイメージをもつこと。」となっている。さらに第5学年及び第6学年においては「ア 自分の感覚や活動を通して、形や色、動きや奥行きなどの造形的な特徴をとらえること。イ 形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつこと。」としている。

第1学年から第6学年までを通じて、図画工作の表現媒体である造形要素の色や形と自分のイメージを結びつけるための方法として、視覚言語との関連を段階的に取り扱っているといえる。感覚を通して捉えるということは、視覚による色や形だけでなく、触覚や皮膚感覚による材質感や湿度のような空気の感覚や雰囲気までも捉えようとするのである。

日本語は豊かな擬音語、擬態語をもっているので、「ザラザラ」「ツルツル」「ピカピカ」「ベタベタ」「しっとり」「むしむし」などのようにテクスチャーや回りの空気感覚までもイメージする言葉がたくさん存在している。これらは色や形で表現したり、鑑賞に

よって色や形を受容し理解したりしながら、イメージの形成に役立つものである。

自分の感覚で捉えることは全く自由気ままに表現したり受けとめたりすることのようにも思えるが、言葉を介して表現や受容を行う場合には、伝達機能としてのある程度の共通のイメージが存在している。例えば、晴れた朝の爽やかな感じを色に例えると明るい緑色や青色を連想することが多い。それは晴れた日の空の青色や木々の緑を経験的に受け止めているからであろう。藤岡喜愛によれば、「一つ一つの事物のイメージだけでなく、それらが組み合わさったもの、過去や未来に属するもの、さらには「世の中」とか、宇宙についてのイメージまで、ほとんどあらゆることについてのイメージが、私たちの心の中にはある。私がこれまで生活し経験したこと、知識として与えられたこと、そうしたことのすべてが歴史的に蓄積されている。」と述べ、色や形、材質感や空気のイメージもある程度心の中に蓄積されていると考えられる。

こうした自分の感覚や活動によって捉えた造形要素や視覚言語に基づいて、イメージの形成を図ることができる。造形要素を表現のために用いる方法が視覚言語、あるいは造形文法とも言われる。色や形の組合せという例示が第3学年及び第4学年では示されている。さらに第5学年及び第6学年では、動きや奥行きという例が示されている。

小学校図画工作科では造形遊びと絵や立体、工作で表すことが表現の内容である。このような表現活動を促すためにイメージの形成の一つの方法として、造形要素の組合せや視覚言語としての奥行きや動きなどが有効な手段となっている。そしてそれは鑑賞の活動においても役立つと考えられる。

## 2-2 中学校美術科での共通事項

次に、中学校美術科での共通事項は、第3学年まで同じで「ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること。イ 形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること。」と定めている。小学校図画工作科で修得した造形要素や視覚言語は、戦前の構成教育運動や戦後の狭義のデザイン教育の方法で捉えられた知性や方法論に偏った幾何学的、抽象的な表現として捉えるのではなく、表現のための要素や方法が人間の感情と結びついて、豊かな美術表現をするための方法として設定されていると理解できる。

形や色彩がもたらす感情というのは、例えば色の感情のように「暖かい感じ」「冷たい感じ」「柔らかい感じ」といった感覚的な内容や高くそびえる塔に対して「崇高な感じ」というような直観的に把握するような内容も含まれている。美術の理解には知的理解の他に感覚的理解や直観的理解、さらには感性といった内容までも含んでいると解することができる。

中学校において美術作品を制作したり鑑賞したりすることで、豊かな感情を育み、情操教育としての役割を担うことができる。そこには形や色、材料のもつ様々な感情があり、絵画やデザインの構成や立体作品のもつ空間感、CGによる非現実のイメージなど多様な表現形式の特性が感覚や感情を豊かにすると考えられる。

## 3. 日本の美術教育教材例

日本の教科書制度は、民間の教科書出版社が作成し、文部科学大臣の検定を経て、都道

府県または市町村教育委員会等が採択する、という仕組みになっている。教科書の改訂は、通常4年周期となっている。2008年の教育課程改訂に対応した教科書については、検定や採択を経て小学校教科書が2011年、中学校教科書が2012年に使用開始となる予定である。したがって、2010年現在では、旧教育課程の基での教科書が用いられているが、新しい教育課程の趣旨を踏まえながら指導に用いられている。以下では、日本文教出版の小学校図画工作、中学校美術の教科書教材を紹介しながら、新しい教育課程との対応を述べる。

### 3-1 小学校図画工作1・2学年教材「できた できた」<sup>1)</sup>



図1 図画工作1・2学年教材

この教材は、表現領域における造形遊びの教材である。校庭などの身近な場所や、様々な素材を体験しながら、形や色を見つけ出して親しむことが主な内容である。教科書(図1)では、砂場での遊び、校庭に水を撒いて描いたり、木片を並べるなどの活動が紹介されている。また、紙を切ったりちぎったりして得られた形から発想する活動が紹介されている。身近な場所での造形遊びでは、砂や石、木片など身の回りにある材料を並べたり、積んだりしながら、全身を使って造形活動を行い、自分の思いついた形や楽しみ方を見つけることが期待されている。素材体験に焦点を当てた造形遊びでは、紙などの身近な素材を切ったりちぎったりして、形を見つけたり、具体的なものに見立てるなど、自分のイメージに結びつけていくことが期待されている。

このように、この教材では、素材に直接触れることで、その素材の特徴と自分の体の感覚によって理解していく学習と、素材の造形的な扱いを通して、楽しみながら造形と自分のイメージとの関係を深めていく学習が設定されており、新しい教育課程で示された共通

事項への対応が含まれている。小学校低学年段階であるので、全身の感覚を使って素材を体験したり、親しみのある生活空間の中で楽しみながら活動することが特に重視されている。

### 3-2 画工作 3・4 学年教材「ゆめをひろげて」<sup>2)</sup>



図2 図画工作 3・4 学年教材

この教材は、表現領域における「絵や立体、工作で表す」教材である。身近なものをもとに空想し、想像した世界を絵画、立体に表すことが主な内容である。教科書(図2)では、時計からイメージをふくらませて描かれた絵画や立体の生徒作品が紹介されている。また、いろいろな描法や視点からイメージをふくらませた絵画や立体作品も紹介されている。子どもたちは、具体的な物体の造形的な特徴から空想する場合もあるし、願いや思ったことなどの概念から空想する場合もある。どちらの場合も、自分の感覚を通して形や色をとらえたり、形や色をもとに自分なりのイメージをもつ、という学習指導要領の共通事項に即した内容となっている。

絵画や立体など、多様な素材や表現形式が教科書において紹介されているのは、空想の世界を自分なりに表現するために、素材や方法が選択できることを意味している。決められたテーマを決められた表現方法で学習させるのではなく、一人一人のイメージをもち、それを表現するためにふさわしい方法や材料を意識することも学習に含まれている。この教材では、空想をふくらませながら自分なり表現のあり方を追求することが子どもたちに求められている。すなわち、身近なものからイメージをもち、そのイメージを具体化するという過程が学習過程となっている。

### 3-3 図画工作5・6学年教材「動くよ動く 絵が動く」<sup>3)</sup>

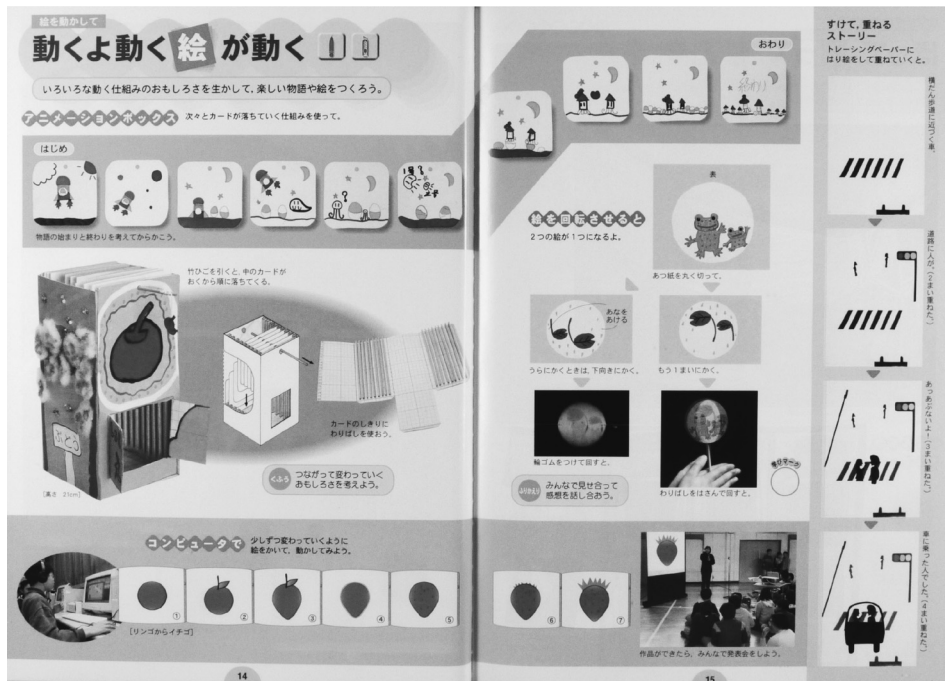


図3 図画工作5・6学年教材

この教材は、表現領域における「工作に表す」教材である。アニメーションの原理をいかした表現活動を行うことが主な内容となっている。教科書(図3)では、板紙に少しずつ変化する絵を描き、それを箱に仕掛けて見るアニメーションボックスや、紙の裏表の絵を回転させて合成する作品、コンピュータを使ったアニメーションの制作などが紹介されている。単に動く絵を描くばかりでなく、自分の考えやイメージを短いアニメーションの中に反映させることが求められている。この教材でも、共通事項に即した学習内容となっている。

この教材では、アニメーションの学習のなかに、色や形の造形性や視覚言語に関する学習が含まれている。それは、動きを効果的に表すための形のあり方、色の使い方、変化する図柄などの視覚伝達デザインや構成につながる学習であるといえる。高学年の教材であるので、子どもたちには、アニメーションの効果的な動きや見え方を通してイメージと造形性の関係を把握することが期待されている。

また、アニメーションは子どもたちの生活において親しまれているメディアであり、そうしたメディア表現の一端を手作業を通して確かめていく学習は、美術教育を含む広義のメディア教育であるといえる。テレビなどで放映されるアニメーションは、手作業の味わいが見えにくいのが、このような教材による制作をとおして、自分たちの絵画表現の延長上に多様なメディア表現があるということを学習させることができる。

### 3-4 中学校美術教材「自然の形や色を生かして」<sup>4)</sup>



図4 中学校美術教材

この教材は、中学校美術科の表現領域における「デザイン・工芸」教材である。木片、小枝、流木、石、木の葉などの身近な自然材料を収集し、その形や色、テクスチャを生かしたデザイン、工芸などの表現活動することが主な内容となっている。教科書(図4)では、小枝や竹で作られた小動物、石に絵の具を塗った魚、色の違う木の葉を貼り付けた構成、木の葉の色と形を基にした平面構成などが紹介されている。

この教材では、自然材料そのものの美しさを感じるとともに、その造形的な特徴を自分なりに捉えることが学習内容の一つに設定されている。さらに、材料の美しさや造形的な特徴の把握をもとに、それらから自分のイメージをふくらませて作品化していくことも学習内容である。

小学校低学年・中学年・高学年を通して示されてきた「自分の感覚で色や形を捉える」、「色や形から自分なりのイメージをもつ」という共通事項が、中学校においても引き継がれ、より明瞭に反映されていることがわかる。

このように、日本の小学校・中学校における美術教育の教材は、学習指導要領に基づいて系統的に組織されており、子どもの発達に応じて素材や技法は異なるものの、「自分の感覚で捉えていく」とこと、「自分のイメージをもつ」ことは全ての学年段階において貫かれている。

## 4. 韓国の美術科教育課程と日本からの示唆点

### 4-1 韓国の美術科教育課程

韓国における教育制度は日本と同様、小学校6年制、中学校3年制、高等学校3年制で

ある。美術教育は、小学校の1、2学年は音楽・美術・体育の総合教科である「楽しい生活」においてなされ、3学年からは「美術」という名称で行われている。

現在、韓国の教育課程は学校級別および学年によって第7次教育課程、あるいは2007改訂教育課程が適用されている。なお、去る2009年12月23日、2009改訂教育課程の総論が発表され、2011学年度から中学校1学年、高等学校1学年を対象に、順次、適用される予定である。これは、2007改訂教育課程をもう一度改訂したもので、国際化時代における知識競争が国の競争力を左右している状況のなかで、グローバルな創造的人材の育成へと、教育の視点を転換することを目的に発表されたものである。基本的には2007改訂教育課程に基づいており、その特徴は次のとおりである。

- ①現場における教育課程の弾力的な運営を指向する。
- ②そのために、教科群、学年群、集中履修制を導入する。
- ③各学校に教科（群）別授業時数の増減を許容する。
- ④学生たちの学習負担を減らし、各自の進路にあわせた教育課程の運営を強調する。
- ⑤多様な体験活動を通じた学習を強化する。

現在は、以上のような全体的な特徴が内在された総論のみ発表され、各論はまだ提示されていない状態である。

一方、現行の2007改訂美術科教育課程は、ポストモダニズムや多文化主義で代弁される社会的動向や、視覚文化美術教育（Visual Culture Art Education）という最近の教育的要求を反映して一部の改編が行われた。すなわち、視覚的イメージを理解、活用、生産する能力である「視覚的文解力（Visual Literacy）」を養うために、映像や視覚文化現象に関する内容を増やしている。

なお、美術科の内容は、美的体験、表現、鑑賞の三つの領域に分かれており、それぞれの活動を通して創造的に表現し、美術文化を理解してそれを継承・発展させることのできる全人的人間の育成にその目的をおいている。特に、10余年前に新設された「美的体験」領域は生活の中で美的感受性や美意識の体験を拡大し、文化的価値と情報、環境、生命など、社会現象に関心を持って積極的に参与する態度を持たせることに主眼をおいている。また、自然と視覚文化環境に対し、児童・生徒の感覚的な体験を通してそれらの関係を認識する思考と批評的眼目や判断過程を経験できる学習活動を提供する領域である。

「表現」領域は、主題の表現方法、造形要素および原理、表現過程、表現の拡張を経験することによって、自分の感じや考えを主導的に表現する領域である。最後に、「鑑賞」領域は、美術文化の理解、批評、享受に必要な基礎的能力や態度を養う領域である。

一方、韓国では今年度から2007改訂教育課程に対応し、中学校1、2、3学年を統合した新しい美術教科書を使用している。その内容に関する比較分析は今後の研究課題とする。

#### 4-2 示唆点

日本や韓国の美術科教育課程は、従来の狭義での美術教育の概念や意味から、より拡張された範疇や概念への思考の転換を背景にしているという点で共通している。すなわち、前述の如く、視覚文化の機能や重要性を強調する現代の文化芸術の社会的要求や動向を教育の場に積極的に導入することにより、美術教育を通して視覚的イメージを理解、活用、生産する能力を養うことに主眼をおいているのである。なお、そうして育成された能力



を、生涯にわたって多様に活用し、生活の全般において主体的に享受できる態度を養うことが美術教育の最終的な目的であるという点ももう一つの共通点といえよう。

一方、両国同様、美術文化の継承や創造に対する関心を高め、自国の伝統美術文化に関する指導の充実を図っており、このような動向は前述したポストモダニズムや多文化主義の反映であると説明できよう。そして、学生たちの発達段階に応じた内容の連続性を考慮している点も類似している。

ただし、韓国の場合は、「国民共通基本教育課程」といって、小学校第1学年から高等学校第1学年までの学習内容の連続性および深化を図る構造上の大きな特徴をもっているに対し、日本の新しい教育課程は、小学校および中学校において共通的に育成すべき資質や能力を「共通事項」として具体的に提示しており、注目すべきである。このような試みは、教師たちにとって学習活動における主眼点および目的を明瞭化できるようにするばかりでなく、その結果として、学生たちの学習主題の把握および授業への積極的な参加と直結されうるといって、示唆的と考えられる。

## 注

- 1) 日本児童美術研究会、『ずがこうさく1・2上』、日本文教出版、2009年
- 2) 日本児童美術研究会、『図画工作3・4下』、日本文教出版、2009年
- 3) 日本児童美術研究会、『図画工作5・6上』、日本文教出版、2009年
- 4) 花篤實ほか（監修）、『美術1』、日本文教出版、2009年

## 参考文献

- 1) 福田隆眞：「共通事項がかわる：視覚言語の活用とイメージの形成」 造形ジャーナル, vol. 406, 開隆堂, 2009.
- 2) 藤岡喜愛：「イメージと人間」, NHKブックス, 1979.
- 3) 三井秀樹：「美のジャポニズム」, 文芸春秋, 1998.

## 付記

本稿は1、2を福田が、3を佐々木、4を金が担当した。全体を福田と金がまとめた。

# 日本 美術教育의 새로운 教育課程과 韓國에 대한 示唆 머리말

日本에서는 2008년부터 初等學校、中學校에 대해 새로운 教育課程이 施行되고 있으며, 學習指導要領은 향후 3년간 완전 실시될 예정에 있다. 美術教育에 있어서도 새 學習指導要領이 시작되어, 새로이「共通事項」이라는 개념을 통해 形態와 色과 이미지의 形成을 강조하는 내용이 도입되었다.

本稿에서는 日本의 새 教育課程의 方針, 美術教育에 있어서의 共通事項, 그리고 初等學校, 中學校 教科書의 教材例의 紹介, 나아가 이를 통해 韓國에서 참고할 만한 사항에 대해 고찰하고자 한다.

## 1. 日本의 새로운 教育課程

日本에서는 1947年 이후 거의 10年 間隔으로 教育課程이 改訂, 實施되어 왔다. 1998年 改訂 이후 최근에는 2008年에 새로이 改訂되어, 현재 그 移行期에 있다. 금번 改訂은 中央教育審議會의 答申을 받아 이하의 7가지 사항을 考慮하여 시행되었다.

- ①改正教育基本法 등을 기반으로 한 學習指導要領의 改訂
- ②「살아나가는 능력」이라는 理念의 共有
- ③基礎的·基本的인 知識·技能의 習得
- ④思考力·判斷力·表現力 등의 育成
- ⑤확실한 学力을 確立하기 위해 必要한 授業時數의 確保
- ⑥學習意欲의 向上과 學習習慣의 確立
- ⑦풍요로운 마음과 健康한 신체의 育成을 위한 指導의 充實

한편, 이번 改訂의 키워드는 「살아나가는 능력」, 「컨피덴시」, 「学力」의 세 가지이다. 「컨피덴시」란 다양한 能力을 의미하며 知識과 技術을 活用하는 能力, 人間關係를 構築하는 能力, 自律的으로 行動하는 能力 등 살아나가는 능력과 관련된 實際的인 能力을 가리킨다. 또한, 学力을 단순한 知識이나 技術의 習得이라고 여기는 것이 아니라, 그것들을 活用한 技能을 習得하고 應用하면서 問題解決에 自律的으로 대처하는 能力을 学力이라고 보는 것이다.

## 2. 初等學校, 中學校 美術教育과 共通事項

### 2-1 初等學校 図画工作科에서의 共通事項

第1学年 및 第2学年에서는, 「가. 자신의 感覺이나 活動을 통해 形態나 色 등을 파악할 것. 나. 形態나 色 등을 기반으로 자신의 이미지를 가질 것」으로 되어 있다. 또한 第3学年 및 第4学年에서는, 「가. 자신의 感覺이나 活動을 통해 形態나 色, 組合 등의 느낌을 파악할 것. 나. 形態나 色 등의 느낌을 기반으로 자신의 이미지를 가질 것」으로 되어 있다. 나아가, 第5学年 및 第6学年에서는 「가. 자신의 感覺이나 活動을 통해 形態나 色, 움직임과 깊이 등의 造形的 特徴을 理解할 것. 나. 形態나 色 등 造形的인 特徴을 기반으로 자신의 이미지를 가질 것」으로 되어 있다.

이상으로 볼 때, 美術의 表現媒体인 造形要素, 色과 形態와 자신의 이미지를 연결짓기 위한 方法으로서, 全 学年에 걸쳐 視覚言語와의 關連을 段階的으로 다루고 있다 할 수 있겠다.

### 2-2 中學校 美術科에서의 共通事項

다음으로, 中學校 美術科에서의 共通事項은 第3学年까지 「가. 形態나 色彩, 材料, 빛 등의 性質이나 그것들로부터 느낄 수 있는 感情을 理解할 것. 나. 形態나 色彩의 特徴 등을 기반으로 対象의 이미지를 취할 것」으로 동일하게 제시되고 있다. 初等學校 図画工作科에서 습득한 造形要素나 視覚言語란, 근대의 構成教育運動이나 이후의 狹義의 디자인교육 方法으로서 이해된 知性 혹은 方法論에 편중된 幾何學的, 抽象的 表現이 아니라, 表現을 위한 要素와 方法이 人間の 感情과 연결됨으로써 豊富한 美術表現으로 발전될 수 있는 하나의 方法으로서 設定되었다고 이해하면 좋을 것이다.

또한 中學校 美術教育에 있어서도, 美術作品의 制作이나 鑑賞을 통해 풍부한 感情을 기르고, 情操教育으로서의 役割을 담당할 수가 있다. 거기에는 形態나 色, 材料가 지니는 다양한 感情이 존

재하며, 繪画나 디자인 構成, 立体 作品이 지니는 空間感, CG에 의한 非現實的 이미지 등 多様한 表現形式의 特性이 感覺이나 感情을 풍부하게 만들 수 있는 것이다.

### 3. 韓國의 美術科 教育課程과 日本으로부터의 示唆点

#### 3-1 韓國의 美術科 教育課程

韓國의 教育制度는 日本과 마찬가지로 初等學校6年制, 中學校3年制, 高等學校3年制로 되어 있으며 美術教育의 경우, 初等學校 1, 2 学年은 美術, 音樂, 體育이 統合된 綜合教科인 「즐거운 生活」에서 다루지고, 3 学年부터 「美術」이라는 명칭으로 독립되어 사용되고 있다.

現在 韓國의 教育課程은 學校級別 및 学年에 따라 第7次 教育課程, 혹은 2007 改訂 教育課程이 適用되고 있으며, 지난 2009년12월23일에 2009 改訂 教育課程의 總論이 發表되어, 2011 学年度부터 中學校1 学年, 高等學校1 学年을 대상으로 始作하여 順次的으로 適用될 予定이다. 이는 2007 改訂 教育課程을 다시 한 번 改訂한 것으로, 世界化, 國際化 時代의 知識 競爭이 國家競爭力을 좌우하는 상황에서 글로벌 創意性 人才 育成이 可能한 構造로의 思考의 轉換을 目的으로 發表된 것이다. 이는 基本的으로는 2007 改訂 教育課程에 바탕을 두고 있으며 그 特徵은 다음과 같다.

- ①硬直性을 脱皮하여 教育課程의 彈力的 現場運營을 指向한다.
- ②이를 위해 教科群<sup>5)</sup>, 学年群<sup>6)</sup>, 集中履修制<sup>7)</sup>를 導入한다.
- ③學校에 教科(群)別 授業時數 增減을 許容한다.
- ④學生의 負擔을 덜어주고 進路에 適合한 教育課程 運營을 強調한다.
- ⑤多様한 體驗活動을 통한 學習을 強化한다.

現在 이와 같은 全体的인 特徵들이 내재된 總論만이 發表되고, 各論은 아직 提示되지 않은 상태이다.

現行 2007 改訂 美術科 教育課程에는 포스트모더니즘과 多文化主義로 대변되는 現代 文化藝術의 社會的 動向과, 視覺文化 美術教育 (Visual Culture Art Education)이라는 最近의 美術教育的 要求가 反映되어 있다. 즉, 視覺的 이미지를 理解, 活用, 生産하는 能力인 「視覺的 文解力(Visual Literacy)」을 기르기 위하여, 映像이나 視覺文化 現象에 관한 內容이 增加되고 있는 것이다.

한편, 美術科 內容 構成의 틀은 美的 體驗, 表現, 鑑賞의 세 領域으로 나누어 제시하고 있는데, 각 活動을 통해 創造的으로 表現하고 美術文化를 理解하며 이를 繼承, 發展시켜 나갈 수 있는 全人的인 人間의 育成에 그 目的을 두고 있다. 특히 10여 年前에 新設된 美的 體驗 領域은 生活 속에서 美的 感受性과 美意識의 體驗을 擴大하여, 文化的 價值와 情報, 環境, 生命 등의 社會 現象에 關心을 가지고 積極的으로 참여하는 態度를 기르는 데 主眼을 두고 있다. 또한, 學生들의 感覺的인 體驗을 통해 自然 및 視覺文化 環境에 대한 關係를 認識하는 思考와 批評의 眼目, 判斷 過程을 經驗할 수 있는 學習活動을 提供하는 領域이다.

表現領域은 主題의 表現方法, 造形要素 및 原理, 表現過程, 表現의 擴張을 經驗함으로써 自己의 느낌과 思考를 主導的으로 表現하는 領域이다. 끝으로 鑑賞領域은 美術文化의 理解, 批評, 享受에 必要한 基礎的인 能力과 態度를 準備하는 領域이다.

#### 3-2 示唆点

日本과 韓國의 美術科 教育課程은 從來의 狹義의 美術教育의 概念과 意味에서 좀더 擴張된 範疇와 概念으로의 思考 轉換을 背景으로 하고 있다는 점에서 그 共通點을 찾아볼 수 있다. 즉 前述한 바와 같이, 視覺文化의 機能과 重要性을 強調하는 現代 文化藝術의 社會的 要求와 動向을 教育의 場에 積極的으로 導入함으로써 美術教育을 통해 視覺的 이미지를 理解, 活用, 生産하는 能力을 기르는 데 主眼을 두고 있는 것이다. 나아가, 그렇게 育成된 能力을 全 生涯에 걸쳐 多様하게 活用하고 生活 全般에서 主体的으로 享受할 수 있는 態度를 기르는 것이 美術教育의 窮極的인 目的이라는 점 역시 또 하나의 共通點이라 할 수 있겠다.

한편, 양국 모두 美術文化의 繼承과 創造에 대한 關心을 높이고 自國의 傳統 美術文化에 관한 指導的 充實을 꾀하고 있는데 이러한 傾向 또한 前述한 포스트모더니즘과 多文化主義의 反映이라 풀이할 수 있다.

나아가, 學習者의 發達段階에 따라 內容의 連續性 및 連繫性을 考慮하고 있다는 점에 있어서도 類似點을 발견할 수 있다.

단, 韓國의 경우는 「國民共通基本教育課程」<sup>8)</sup> 이라 하여, 初等學校 1學年부터 高等學校 1學年 까지 學習內容의 連續性 및 深化를 피하고자 하는 構造上의 커다란 特徵을 보이는 데 비해, 日本의 새로운 教育課程은 初等學校, 中學校에서 共通의 育成해야 할 資質과 能力을 「共通事項」으로서 具體的으로 提示했다는 점에서 特記할 만하다. 이러한 시도는 教師들로 하여금 學習活動에 있어서의 主眼點 및 目的을 明瞭化할 수 있도록 도울 뿐만 아니라, 그 결과 學習에 임하는 學習者의 主題 把握 및 積極的인 授業 參與와도 直結될 수 있다는 점에서 대단히 示唆的이라 사료된다.

現在 韓國에서는 2007 改訂 教育課程에 대응하여 中學校 1, 2, 3學年을 統合해 만든 새로운 美術 教科書를 2010년부터 適用, 使用하고 있다. 이에 대한 內容的 分析과 高찰은 向後의 후속 研究課題로 다루고자 한다.

#### 4. 맺는말

美術教育의 直接的인 目的 중 하나는 美術의 表現이나 受容과 관련된 能力의 育成이다. 이는 美術作品이나 造形作品을 制作하기 위한 技能이며, 선인들의 作品을 受容, 理解하는 能力으로 설명된다. 나아가, 美術教育에는 美術文化를 주로 하는 文化의 理解와 創造의 役割이 요구된다. 이러한 점에서, 본 研究에서 다루어진 「共通事項」의 內容은 美術教育에 있어서의 基礎的 能力의 育成을 意味한다고 이해할 수 있겠다.

學校에서의 美術教育은 여러 가지 目的을 가지고 있다. 造形의 素材에 접하면서 發想이나 構想을 펼쳐 나가며, 色과 形態를 사용하여 自己表現이나 目的表現을 하고, 鑑賞을 통해 美術의 世界를 理解함과 同時에 이미지를 확장시키는 등, 다양한 活動을 통해 美術에 의한 人間形成과 美術의 教育을 具現하고 있다. 말하자면 美術教育은 美術文化의 理解, 나아가 그것의 繼承과 創造를 目的으로 하고 있다고 말할 수 있겠다. 이를 위해 이미지의 形成과 視覺言語의 理解, 活用은 主要한 役割을 해내리라 期待된다.

#### 注

- 5) 既存의 教科들을 教育目的上의 近接性, 學問 探究 대상 또는 方法上의 隣接性, 실제 生活樣式에서의 相互 連關性 등을 고려, 광역군 概念으로 유목화하는 概念
- 6) 初等學校는 1-2學年, 3-4學年, 5-6學年의 3개 學年群으로, 中學校와 高校는 3개 學年을 각각 1개 學年群으로 設定하였으며, 學年別, 學期別, 分期別 集中履修를 통해 學生들의 學期당 履修科目數를 줄여주는 效果가 있다.
- 7) 2-3개 學年에 걸쳐 履修科目을 學年別로 集中해서 履修하거나, 1年 동안 履修 하는 科目을 한 學期 동안 集中하여 履修하도록 하는 것으로, 集中學習이 可能하 고 授業의 效率性을 높일 수 있다.
- 8) 2007 改訂 教育課程에서는 初等學校 1學年부터 高等學校 1學年까지 10年間을 「國民共通基本教育課程」으로 정하여 學習內容의 連續性 및 深化를 피하였으며, 2009 改訂 教育課程에서는 다시 初等學校 1學年부터 中學校 3學年까지의 9年間 을 「共通 教育課程」으로 再設定하였다.

#### 參考文獻

- 1) 강성원 : 「美術의 概念 擴張에 의한 美術教育의 實際的 接近과 教育課程 探索」, 성균관대 教育大學院 碩士學位 論文, 2008.
- 2) 教育科學技術部: 「2007 改訂 教育課程 中學校 教育課程 解說 - 美術」, 2007.
- 3) 教育科學技術部: 「2007 改訂 教育課程 初等學校 教育課程 解說 - 美術」, 2007.
- 4) 김승익: 「2009 改訂 教育課程 무엇이 달라지나」, 教育科學技術部 教育課程 企劃課, 2010.
- 5) 박민정: 「포스트모더니즘 談論과 教育課程 論議의 爭點」, 教育課程研究, Vol. 23, No. 4, 2005.
- 6) 백영주: 「美術批評을 통한 視覺 文化 美術教育」, 한양대학교 教育大學院 碩士學位論文, 2008.